

## はにい『いのちを大切に作る心』

令和6年12月17日



「いのち」は、いつか終わりを迎えます。当たり前と分かっている、そのことについて、真正面から向き合う時間は、どのくらいあるのでしょうか。

ゲストティーチャーを招いた中学校の道徳科の授業。ご自身の経験を、子どもたちに語ってくださる。

小学生の時に腎臓病を患い、腎臓透析を30年間続け、合併症の不安やいつまで生きていられるのだろうという思いと、常に隣りあわせだったという。

「望んでいた腎臓移植をしても、私は幸せではありませんでした。」と、ゲストティーチャーの言葉。

「腎臓を移植できたってことは元気になったんだよね、何で幸せにならないのかな。」

「自分のいのちと、他人のいのちに違いはないからかな。」

「それでも、元気になれたらうれしいよね…。」

生徒たちは、「いのち」について、そして「幸せ」について、お互いの意見や考えを伝えあいます。

腎臓移植後、体は元気になったのに、ずっと悩み続けていたというゲストティーチャー。前向きになるきっかけは、ドナーファミリーからの「腎臓をもらってくれてありがとう」の言葉でした。

「生きていていいんだ。」そう思ってからは、「ドナーの分まで元気に生きようと、精いっぱい今を楽しんで生きています。」ゲストティーチャーからの言葉で、授業は幕を下ろしました。

「ゲストティーチャーが、元気いっぱいな理由を知りました。」「『いのち』のそばには、それぞれの家族がいて、それぞれに思いがあるんだ。」教室いっぱいに「いのちを大切に作る心」が広がりました。